

訳語の位置―『あゆひ抄』の移動訳―

On the translation method of “Ayuhi-syo”

小柳 智 一

(国語教育講座)

(平成十八年九月七日受理)

はじめに

古典文学作品を現代語訳する時の基本方針は、原文の意味する内容を過不足なく訳出することである。したがって、逐語的な解釈がすべての出発点であり、そのためには訓詁註釈に力を注ぐ必要がある。これを怠るものは、古典研究として信用に足るとは言えない。

一般に、翻訳とは対照言語学的な作業だと言える。原文の語・表現を取り上げ、それに対応する語・表現を、訳文となる言語の中に探り、二つの言語を摺り合わせるからである。ただし、完全に対応する二言語などないから、翻訳は単純な移し替えに終わらない。そこで、ある種の技術が必要となり、それを用いて近似的な翻訳を行うことになる。

古典文学の現代語訳もこの例に漏れない。古典語と現代語を対照し、原語に対応する訳語を求めきれなければ、何らかの技術を用いる。本稿で考察するのは、この技術に関する問題である。古典語の訳し方の研究

は従来もあったが、その多くは、助詞・助動詞に当てる訳語を問題とするもので、古典語の助詞・助動詞の意味を説明することが目的だった。本稿の関心は、そのような個々の訳語の当否ではなく、訳語を訳文中のどの位置に置くかという点にある。

古典語の研究で訳語を重視した最も夙いものは、富士谷成章の『かざし抄』(一七六七年成)と『あゆひ抄』(一七七八年刊)であろう。特に後者は「あゆひ脚結」(「助詞・助動詞」にほぼ相当)に当てる「里言」(口語訳)を細かく指示している。そこで、『あゆひ抄』の里言の指示を観察し、訳語の位置に関する知見を得ようと思う。

第一節 訳語の位置

最初に、新編日本古典文学全集『古今和歌集』(一九九四年、小学館)の訳文を使って、訳語の位置にどのような種類があるかを見ておく。

この注釈書の訳文を使用するのは、逐語訳から遠く奔放に訳しているために、かえって原文との相違が鮮明だからである。例えば、

1 春霞 色の千種に 見えつるは たなびく山の 花の影かも〈古今

集2・一〇二／寛平御時后の宮の歌合の歌 藤原興風〉

訳文Ⅱ春霞があのように色さまざまに見えるのは、それがたなびいている山に乱れ咲いたさまざまの花の色が、霞に影を落していたのだ。たかなあ。

この訳文は原文に対応箇所のない部分が多い。傍線部がそれで、これを取り除き（実線部は除くと不自然になるので残す。後述）、原文に対応箇所のある訳語だけを残すと、大体次のようになる。

春霞が色さまざまに見えるのは、たなびいている山の花の影かなあ。

このように、訳文には、原文に対応を持つ部分と持たない部分がある。まず、対応を持つ部分について見ると、原文の「春霞＝色の千種に＝見えるは」という語順は、訳文でも「春霞が＝色さまざまに＝見えるのは」とある。原文中の原語の位置と、訳文中の訳語の位置が平行的な関係にあるので、これを「平行訳」と呼ぶことにしよう。

次に、対応を持たない部分は二つに分けられる。一つは実線部で、古典語ではないのが普通だが、現代語では、ないと不自然になるので加えるをえない。これを「添加訳」と呼ぼう。もう一つは破線部だが、これは訳者が補った解説に近いので、「補足訳」と呼ぶことにする。補足訳は訳文の内容を明確にするのに役立つが、あまり補いすぎると、訳文なのか解説文（鑑賞文）なのか曖昧になってしまう。

さらに別の例で、原文と訳文を比較してみよう。

2 人目もる 我かはあやな 花薄 などか穂に出でて 恋ひずしもあらむ〈古今集11・五四九／題知らず 読み人知らず〉

訳文Ⅱ私は人目をはばかりる必要があるのだろうか。無用な苦しみをしているものだ。どうしてすすきの穂がぱっと出るような公然たる恋をせずにおられようか。

ここで注意したいのは、原文で文中にある「か」が、訳文では文末に移動していることである。このような訳を「移動訳」と呼ぶことにしたい。移動訳は平行訳と同じく原語に対応を持つが、訳語の位置が変わっている。2は原文の位置より下に移すので「下方移動訳」である。これに対して、3は原文の「はて」が「おしまいまで」と訳され、原文の位置より上に移してあるので「上方移動訳」である。

3 命にも まさりて惜しく あるものは 見はてぬ夢の 覚むるなりけり〈古今集12・六〇九／題知らず 壬生忠岑〉

訳文Ⅱ命は惜しいものであるが、それにもまして惜しいのは、思う人との楽しい逢瀬の夢をおしまいまで見ないうちに、それが覚めてしまうことであつた。

また、2・3は対応する訳語全体が移動するが（全部移動訳）、次のように一部だけが移動する場合もある（一部移動訳）。

4 待つ人に あらぬものから 初雁の 今朝鳴く声の めづらしきかな〈古今集4・二〇六／初雁をよめる 在原元方〉

訳文Ⅱ雁などというものは、別に私の待ち人でもないのだが、今朝聞えてくる初雁の声は、何と清新な響きをもたらしてくれることだろう。

4の原文の「かな」に対応する訳語は「何とくことだろう」だと思われる、訳語の一部である「何と」が上に移動している。一部移動訳の訳語は、添加訳・補足訳の訳語と見分けにくいことがあるが、原語に対応があると見て、一往分けておく。なお、下方一部移動訳の確実な例は見つ

けられなかったが、理屈上はありうる。以上を整理する。

原文に対応を持つ

平行訳：原文の位置のまま訳す

移動訳：原文とは別の位置に訳語を移して訳す

上方移動訳（全部・一部）

下方移動訳（全部・一部）

原文に対応を持たない

添加訳：現代語の表現として必要な語を加えて訳す

補足訳：原文の内容に対して解説を補って訳す

第二節 『あゆひ抄』の訳し方

『あゆひ抄』は助詞・助動詞の訳し方を詳しく指示し、

5 ● めぐらして心得る脚結なり。〈○15才〉⁴

6 ○ 文字のかたはらにつけたるは里同じ。又は、さながらめぐらす脚結なり。〈○15才〉

7 ○ 文字の間につけたるは里言を加へて心得べき所なり。〈○15ウ〉

という専用の符号を用いている。それぞれの使用例を挙げると、まず、5は次のような箇所で見られている。

8 何や何……。ただの挿頭・脚結を承けたるをば「や」を里せずして、下何の下にめぐらして心得べし。〈一18才〉

雪の内に 春は来にけり 鶯の 凍れる涙 今やとくらむ
ルテアロカ
今集1・四

これは「や」の里言である【か】を句末（文末）に移動することを示しており、前節で見た移動訳の指示である。次に、6の前半「文字のか

たはらにつけたるは里同じ」は、次のような例である。

9 「末とす」といふ。脚結を承けたる 里同じ。〈一24才〉

花と見て 折らむとすれば 女郎花 うたたあるさまの 名にこそありけれ
古今集19・一〇一九

これは、原文の「むとす」をそのままの位置でそのまま里言とすることを指示する。前節の平行訳である。里言を換える場合には、○を付かず直接その位置に里言を書き込んでいる。次例は「の」の位置に【のやうに】という里言を置くという意味である。

10 又歌に「のごとく」とよむに似たる「の」あり。これを「ごとかの」といふ。心得て【のやうに】と里すべし。〈三三才〉

風吹けば 峰にわかるる 白雲の 絶えてつれなき 君が心か
古今集12・六〇二

なお、6の後半「さながらめぐらす」の適例は『あゆひ抄』にないが、原語をそのまま里言とする移動訳のことである（後掲(18)を参照）。最後の7は「加へて」とあるように、添加訳の指示である。

11 第三「中のや」といふ。上下に名を附てたり 里同じ。心得ては下に別に【何やかや】とくはへて見るべし。〈一6ウ〉

何となく 花やもみち。を見るほどに 春と秋とは いくめぐりしつ
風雅集17・一八五六

このように、『あゆひ抄』には、平行訳・移動訳・添加訳の指示が見られる——補足訳は一例一例を個別的に扱わざるをえないので技術として一般化しにくく、文法書での指示には向かない——。三つの訳し方のうち、平行訳は単純だが、移動訳・添加訳はそうではない。

移動訳を指示する5および6の後半、それに8には「めぐらす」という語があり、添加訳を指示する7と11には「くはふ」という語がある。

表 1

分類項目	原語・原文		めぐらす	『あゆひ抄』 まはす	つく	くはふ	その他
	原語	原文					
大旨	連体終止					1	
詠属	符号説明		2			1	
	句中やこそや			1	1*	1	
疑属	句中や	並列助詞					
	句中かな	「かな」と呼称		1		1	
不定詞	句中か			2	2*		
	句中かは	疑問文		1	1*	1	
曾家	句中や	已終形・終止・疑問	1		1	2	
	句中や	已終形・終止・疑問			1		
禁属	句中や	已終形・終止・疑問			1		
	句中や	已終形・終止・疑問			1		
毛家	句中ぞ		2	1			1つむ
	句中こそ					1	
止家	句中と	助動詞	1				1里言
	句中と	助動詞	1				
志家	句中か	不定終止か					1証歌
	句中かも	不定終止か					
能美家	句中し	助動詞	1				1里言
	句中し	助動詞	2	1			
去倫	句中のみ		1				1かぶらす
	句中						
由久身	ゆく					1	1里言
	やる		17	14	14	17	8

*…「めぐらす・まはす」と組み合わせて使用

移動訳・添加訳を指示する語には、他に「まはす・つく・そふ・つむ・かぶらす」が見え、また、里言や「証歌」（例となる歌）を示すだけのものもある。それらの使用分布をまとめたのが表1である。表中の「符号説明」は先掲5〜7で用いられていること、「名称」は「めぐらす中」のぞ」などの名称として用いられていることを表す。

一般論として「めぐらす」と「まはす」は類義的だが、『あゆひ抄』でもこの二語は同じように移動訳を指示すると考えられる。理由の一つは、先掲8の「めぐらす」と次の「まはす」を比べて違いがあるように思われず、符号も同じ●が使われていることである。

12 何かも何 ……。里言ただ前条と同じ《「かさても」と里す―小柳注》。但し、下何の下にまはして心得べし。へ15ウ

あしひきの 山鳥の尾の しだり尾の 長々し夜を ひとりかも●
寝む ウカサデモ 《拾遺集13・七七八》

もう一つの理由は、先掲5の●の説明「めぐらして心得る脚結なり」が草稿本では次のようにあることである。

13 ● まはす 里言 《草稿本83ウ》

刊本の「めぐらす・まはす」が草稿本でどのようにあったかを示すと、表2のようになる。「めぐらす」の欄の「マハス」は、刊本で「めぐらす」とある部分が草稿本では「まはす」とあることを示し、「まはす」の欄の「マハス」は、刊本に「まはす」とある部分が草稿本でも「まはす」とあることを示す。また、「×」は刊本に「めぐらす・まはす」とある部分が草稿本ではどちらの語も使用されていないか、もしくは刊本と対応する箇所自体が草稿本にないことを示す。

この表2から、刊本の「めぐらす」は、草稿本の「まはす」を改めたものか、草稿本の後に加えられたものであることがわかる。特に、符号

説明を13から5に変更したことや、「ぞ・こそ・こそは」の名称に「め

ぐらす」を採用した

ことを考えると、成

章は「まはす」から

「めぐらす」へ用語

を変更しようとした

のだと思われる。た

だし、完全にはなさ

れず、草稿本の「ま

はす」が残った箇所

(九例)や、刊本で

「まはす」が加えら

れた箇所(四例)、

逆に「めぐらす」か

ら「まはす」に変更

された箇所(一例)

がある。変更が不完

全な理由は不明だが、

概ね、草稿本で「ゝ

詞」だった項目は

表2

草稿本	刊本	禁止副詞な	句中か	句中かは	句中かも	句中や	句中やは	句中やこそや	句末かな 名詞接続	句中も 「かな」と呼応	句中も 「てしか」と呼応	願属	詠家	詠詞	願詞	ぞ類	も類	と類	し類	のみ類
めぐらす	まはす	×	マハス	マハス	メグラス	マハス	×	マハス	マハス	マハス	マハス	×	×	×	×	×	×	マハス	マハス	マハス
×	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス	マハス

「まはす」が優勢なのに対し、「ゝ類」だった項目は「めぐらす」が優勢になるので、最終稿の成立順序に関わるのかもしれない。いずれにせよ、「めぐらす」と「まはす」は使用の区別がない。

さて表1に戻ると、移動訳の「めぐらす・まはす」と添加訳の「くはふ」が排他的に分布するのは当然として、「つく」の分布が「めぐら

す・まはす」の分布に重なることが見て取れる。これは「つく」が移動訳を指示することを示すだろう。訳語の位置を考えようとする今、原語と里言の位置が異なる移動訳は最も興味深い。次節以降では、この移動訳を観察することにする。

ところで、周知のように、『あゆひ抄』は助詞類を文型に分けて整理している。例えば、係助詞「か」は、出現位置が句末か句中か(「何か」「何か何」と表示)、後者の場合は上部に不定語があるか否か、という構文上の特徴にもとづいて、次の三つの文型に分ける。

A — か — 秋の野の草の袂か〔古今集4・二四三〕

B — か — 頼めか置きし〔後拾遺集11・六四一〕

C 不定語 — か — 散る花をなにか恨みむ〔古今集2・一一二〕

特に、位置は『あゆひ抄』全体を通して重要な観点であり、表1で助詞を「句末」と「句中」に区別して表示したのも、このためである。以下の観察では、文型も考慮に入れることにする。

第三節 『あゆひ抄』の移動訳

原語が句中に位置する場合から観察しよう。まず、上方移動訳を見ると、指示される原語は係助詞「も・ぞ・し」である(「めぐらす」二例、「まはす」四例、里言で示すもの一例)。

(1) 連用形も — かな 「句中も」⁵「かな」と呼応 「まはす

訳 さても連用形 — かな

(2) 対格名詞ぞ — 「句中ぞ」上にまはす

訳 こちは・何かしらぞ対格名詞 —

(3) 連用形ぞ — 「句中ぞ」上にまはす

訳 こちは・何かしらず連用形――

(4) 連用形しも―― 「句中しも」 まはす

訳 《……も多きに・もあらうに》 〳にきぎつて連用形――

(5) 〳しも―― 否定 「句中しも」 上にめぐらす

訳 あながち 〳も―― 否定

(5') 〳としはなけれども 「句中しは」 里言

訳 あながち――といふではなけれども

(6) 〳し―― ば (原因理由) 「句中し^{条件句中}」 めぐらす

訳 もとより 〳―― によつて

『あゆひ抄』の証歌を挙げる。なお、(2)は証歌はなく「物ぞ思ふ」

「花ぞ見る」が挙げられているだけである (二五才)。

14 音羽川 せき入れて落とす 滝つ瀬に 人の心の 見えもする

かな 〳八ウ、拾遺集8・四四五／(1) 〳

15 長しとも 〳思ひぞ果てぬ 昔より 逢ふ人からの 秋の夜なれ

ば 〳二五ウ、古今集13・六三六／(3) 〳

16 梅の花 咲ける春べは くらぶ山 闇に越ゆれど 〳しるくぞあ

りける 〳二五ウ、古今集1・三九／(3) 〳

17 梅の花 見にこそ来つれ 〳鶯の ひとくひとくと いとひ

しも居る 〳二六才、古今集19・一〇二／(4) 〳

18 限りなき 君がためにと 折る花は 〳時しも分かぬ ものにぞ

ありける 〳二二七ウ、古今集17・八六六／(5) 〳

19 浦風に 〳物思ふとしは 〳なけれども 波のよこそ 寝られざ

りけれ 〳二二八才、続古今集10・九二四／(5') 〳

20 〳咲きそめし 宿し変はれば 〳菊の花 色さへにこそ 移ろひ

にけれ 〳二二九ウ、古今集5・二八〇／(6) 〳

次に、句中に位置する語を下方移動訳する場合を見ると、主に係助

詞「か・や・ぞ・こそ」に対して、里言を句末に移動するよう指示

している――「めぐらす」一四例、「まはす」九例、「つく」一三例

(このうち八例は「めぐらす・まはす」と組み合わせて使用)、「つ

む」一例、里言で示すもの二例、証歌を挙げるだけのもの一例。な

お、添加訳を指示する「つく」が例外的に一例ある――。

I か

(7) 〳か―― 「句中か」 まはして下につく

訳 〳―― かつ思ふ

(8) 〳かも―― 「句中かも」 下にまはす

訳 〳―― かつても

II 不定語か

(9) 不定語か―― 「句中か」 まはして下につく

訳 不定語―― ぞ

(9') 不定名詞か―― 「句中か」 下につく

訳 不定名詞が―― ぞ

(10) 不定語かは―― 「句中かは」 まはして下につく

訳 不定語―― ぞいの

(11) 不定語かも―― 「句中かも」

訳 a 不定語―― ぞさても まはして下につく

(12) 不定語しか(も・は)―― 「句中か(も・は) 不定語しか」 証歌

訳 不定語このやうに―― ぞ(さても・いの)

III や

(13) a 主格名詞や―― 「句中や^{係助詞}」 まはして下につく

訳 主格名詞が・は——か

b 非主格名詞や——〔句中や^{係動詞}〕つく

訳 非主格名詞に・を・は——か

(13') 名詞や——不定語 〔句中や^{や+不定語}〕下につく

訳 名詞は——不定語ぞ

(14) 副詞・連用形や——〔句中や^{係動詞}〕下にめぐらす

訳 副詞・連用形——か

(15) 〓 やは——〔句中やは〕

訳 a 〓 かや めぐらして下につく

b 〓 は——かや 下につく

(16) 〓 もや——〔句中^{もや}〕まはす

訳 〓 も・なども——か

IVぞ

(17) 名詞類ぞ——名詞 〔句中ぞ・名称ぞ〕下につむ・めぐらす

訳 名詞類が——名詞ぢやぞ

(18) 〓 ぞ——形容詞 〔句中ぞ〕下につく

訳 〓 は——形容詞ぞ

(19) 〓 もぞ——〔句中ぞ^{もぞ}〕めぐらして下につく

訳 〓 ども・なども——うに・ばわるいに

Vこそ

(20) 〓 こそ(は)——名詞 〔名称こそ(は)〕めぐらす

訳 〓 こそ(は) 《なんのことなしに》——名詞なれ

(21) 〓 もこそ——〔句中こそ^{もこそ}〕めぐらす・里言

訳 〓 ども・なども——うことぢやに

上方移動訳にはなかったが、下方移動訳には「めぐらす・まはす」と

「つく」を組み合わせた「めぐらしてつく・まはしてつく」が見られる(表1の*)。この「つく」が移動訳を指示することは問題がないが、

単独で用いられた「つく」も移動訳を指示するのだろうか。確認しておこう。単独の「つく」は(9')・(11) b・(13) b・(13')・(15) b・(18)の説明文で使用されており、このうち(9')・(13')・(15) b・(18)の説明文は、

21 里「か」をまはして、下何の下に【ぞ】とつくべし。但し名を承けたるは「か」を【が】になして、下に【ぞ】をつくべし。へ13オ／実線部は(9')、破線部は(9)へ

22 「や」を【は】と里して、下何に【ぞ】をつくべし。へ17オ／(13)へ

23 多くは「やは」を【は】と里して、下何に【かや】【かやい】などつくべし。へ21ウ／(15) bへ

24 又下何、様の引靡にて「越えぬ夜ぞなき」「春ぞ少なき」など、勢迫りたる詞は「ぞ」を【は】になして、下何に「ぞ」とつくるもよし。へ25オ／(18)へ

とあり、これらの説明文は次のDの形式で共通している。

D 「a」を【b】になし(と里し)て、下に【γ】と(を)つく

これは一見すると、「a」を【b】と平行訳し、かつ【γ】を添加訳すると読めそうである。しかし、(13)の説明文に、

25 里いづれも「や」をまはして、下何に【か】をつけて心得べし。

……。一、名又名に通ふ脚結・挿頭を承けたるをば「や」を【が】

又は【は】になして心得べし。二、名に「に」「を」「は」などいふことをつくべきを、直ちに「や」と承けたる歌をば、それぞれに

【に】【を】【は】などつけて心得べし。へ17ウ／(13)・実線部はa、破線部はbへ。

とあって、はじめの実線部に【か】が「や」の移動訳であることが明記

されているので、続きの実線部にある【が・は】は「や」の里言ではなく、「や」の位置に添加された里言と理解しなければならない。とすれば、Dも、「 α 」の位置に【 β 】を添加し、「 α 」の訳語【 γ 】を下方移動すると読むことになる。

なお、25の破線部も単独で用いられた「つく」だが、【に・を・は】を添加することを指示しており、唯一の例外である。ただし、「つく」は本来、「めぐらす・まはす」が移動の意を表す動詞であるのと違って、添加の意を表す動詞だから、ありうる例外ではある。

残る(11)bの説明文は、次の26のようにある。aとbの訳の違いは、「も」の里言【さても】を平行訳するか移動訳するかで、「か」の里言はどちらにせよ、【ぞ】と下方移動している。

26 「かも」をまはして下何の下に【ぞさても】とつくべし。又直ちに【さても】と当てて、下何に【ぞ】をつけて心得るも同じ。へ一

16 オ／(11)・実線部はb、破線部はa

以上、25の破線部にある一例を除くと、単独で用いられた「つく」もすべて移動訳（下方移動訳）を指示している。ちなみに(17)の説明文では「つむ」が用いられているが、これは「つく」と同意である。それは、次の27の説明文がDと同形式であることから、明らかであろう。27名・挿頭・脚結を承くる時、里【ぞ】を【が】になし、装を承くる時【のが】になして、下に【ちやぞ】とつめて心得べし。へ二 4 ウ／(17)へ

また、前節で、草稿本の「まはす」が刊本の「めぐらす」に変更されたことを見たが、「つむ」と「つく」も同様の関係で、刊本の「つく」は多くの場合、草稿本の「つむ」から変更されたものである。ただし、変更はやはり不完全で、ここでも「つむ」が残っている。

さて、『あゆひ抄』の証歌を挙げる。(18)は証歌が挙げられていないので、24の説明文を参照。(20)は実は検討を要するのだが、次節で詳しく述べることにして、今は下方移動訳の例としておく。

28 待てと言ひし 秋もなかなばに なりぬるを 頼めか置きし 露は
いかにぞ へ一 12 ウ、後拾遺集 11・六四一／(7)へ

29 あしひきの 山鳥の尾の しだり尾の 長々し夜を ひとりかも
寝む へ一 16 オ、拾遺集 13・七七八／(8)へ

30 いくばくの 田を作ればか ほととぎす しでの田長を 朝な朝
な呼ぶ。へ一 13 オ、古今集 19・二〇一三／(9)へ

31 小船さし わたの原から しるべせよ いづれか海人の 玉藻刈
る浦。へ一 13 オ、後拾遺集 11・六一六／(9)へ

32 咲く花は 千種ながらに あだなれど 誰かは春を 恨み果て
たる。へ一 14 ウ、古今集 2・一〇一／(10)へ

33 あはれてふ 言だになくは 何をかも 恋の乱れの つかね緒に
せむ へ一 16 オ、古今集 11・五〇二／(11) a へ

34 誰をかも 知る人にせむ 高砂の 松も昔の 友ならなくに へ一
16 オ、古今集 17・九〇九／(11) b へ

35 東路の さやの中山 なかなかになし か人を 思ひ初めけ
ん。へ一 26 オ、古今集 12・五九四／(12)へ

36 たれし かも とめて折りつる。 春霞 立ち隠すらむ 山の
桜を へ一 26 オ、古今集 1・五八／(12)へ

37 なにし かは 人も来て見む。 いとどしく 物思ひまさる
秋の山里 へ一 26 オ、後拾遺集 4・三三四／(12)へ

38 谷風に とくる氷の 隙ごとに うち出づる浪や 春の初花。
へ一 18 ウ、古今集 1・一二／(13) a へ

- 39 流れ出づる 方だに見えぬ 涙川 沖干む時や 底は知られむ
 〈一18ウ、古今集10・四六六／(13)b〉
- 40 春霞 立てるやいづこ。 みよし野の 吉野の山に 雪は降りつ
 つ 〈一17オ、古今集1・三／(13')〉
- 41 雪の内に 春は来にけり 鶯の 氷れる涙 今やとくらむ 〈一18
 ウ、古今集1・四／(14)〉
- 42 春霞 立つを見捨てて 行く雁は 花なき里に 住みや慣へる
 〈一18ウ、古今集1・三二／(14)〉
- 43 もろともに なきてとどめよ きりぎりす 秋の別れは 惜しく
 やはあらぬ 〈一21ウ、古今集8・三八五／(15)a〉
- 44 春の夜の 闇はあやなし 梅の花 色こそ見えね 香やは隠るる
 。 〈一21ウ、古今集1・四一／(15)b〉
- 45 さむしるに 衣かた敷き 今夜もや 恋しき人に 逢はでのみ寝
 む 〈一23ウ、伊勢物語・六三段／(16)〉
- 46 忘れ草 枯れもやする。と つれもなき 人の心に 霜は置かな
 む 〈一23ウ、古今集15・八〇一／(16)〉
- 47 水の上に 浮かべる船の 君ならば ここぞ泊り。と 言はまし
 ものを 〈一25オ、古今集17・九二〇／(17)〉
- 48 玉の緒よ 絶えなば絶えね 長らへば 忍ぶる事の 弱りもぞす
 る 〈一24オ、新古今集11・一〇三四／(19)〉
- 49 色に出でぬ 思ひのみこそ。 ときは山。 わが身しぐれは
 ふるかひもなし 〈一27オ、続古今集11・九九八／(20)〉
- 50 風靡く すすきの末葉 露深し。この頃こそは。 初雁の声
 。 〈一29ウ、拾遺愚草・下二三一九／(20)〉
- 51 梅の花 外ながら見む 我妹子が とがむばかりの 香にもこそ

- 染め 〆事チヤニ 〈一14ウ、後撰集1・二七／(21)〉
- 52 玉鉾の 遠道もこそ。 人は行け 〆事チヤニ など時の間も 見ねば恋しき
 〈一24ウ、拾遺集12・七三七／(21)〉
- 右の他、間投助詞「や」、係助詞「も・し」、禁止副詞「な」、副助詞
 「のみ」にも下方移動訳の指示が見られる。
- (22) 〆こそや 〆 〆句中や 〆 まはして下につく
 訳 〆こそ 〆はいの
- (23) 〆も 〆てしか 〆句中も 〆てしかと呼応 〆下にめぐらす
 訳 〆 〆 〆事がなるならよからう
- (24) 〆な 〆そ 〆禁止副詞な 〆まはす
 訳 〆 〆 〆てくるるな・ことはおけ・やめにせよ等
- (25) 〆し 〆ば 〆仮定条件 〆句中し 〆条件句中 〆めぐらす
 訳 〆 〆 さへするならば
- (26) 〆のみ 〆 〆句中のみ 〆めぐらす
 訳 〆 〆 〆てばかり
- (22)は「こそ」に下接する「や」の証歌として「我こそや見ぬ人恋ふ
 る病すれ」〈拾遺集11・六六五〉という孤例を挙げ、躊躇しながらも
 「里」「や」をまはして下に【はいの】とつくべきにや」(一7オ)と試
 案を示す。「我こそ見ぬ人恋ふる病するはいの」と訳すのだろう。
- (23)の説明文は次の通りである。
- 53 上に「も」の字ありて打ち合へるは、例の難き事を欲り思ふ心あ
 り。里「も」を下にめぐらして【事がなるならよからう】といふ。
 〈一25オ／(23)・「打ち合ふ」は呼応〉
- 【事がなるならよからう】のどの部分が「も」の里言かわかりにく
 いが、「も」と呼応しない「旅寝してしか」〈一25オ、古今集2・一二

六◇や、「も」と呼応する「さやにも見しか」ル事ガナルナラヨカラ「へ一25才、古今集

20・一〇九七」と比較してみると、「事になるならよからう」は

「も」の意味を含んだ里言だと知られる。(24)の「な」も同様で、

54 「何な」といさむるよりは心ゆるし。里「な」をまはして【てく

るるな】【ことはおけ】【やめにせよ】【よしにせよ】などいふべし。

へ一29ウ／(24)

とある【てくるるな】などの里言には「な」の意味が含まれていると考
えられる。『あゆひ抄』は、このような場合も「めぐらす・まはす」と
言うのである。証歌を挙げる。

55 あな恋ひし 今も見てしか ルコトガナルナラヨカラ 山賤の 垣ほに咲ける 大和撫

子へ一25ウ、古今集14・六九五／(23)

56 山高み 人もすさめぬ 桜花 いたくなわびそ ル事ハオケ 我見はやさむ

へ一29ウ、古今集1・五〇／(24)

(25)と(26)はそれぞれ「深草の野辺の桜し心あらば」〈古今集16・八三
二〉、「一人のみながむるよりは」〈古今集4・二三六〉などを挙げ、「桜
さへ心あるならば」「一人ばかりながむるよりは」と平行訳してもよい
が、「心ありさへするならば」「一人ながめてばかり」と下方移動訳した
方が理解しやすいと述べている(二28才、三8ウ)。

最後に、句末に位置する原語について、上方移動訳の指示がある場合
を見る。次の二つである。

(27)——連体形＋名詞かな (句末かな 名詞接続) まはす

訳——連体形事かな、名詞

(28)——と (句末と 倒置・格助詞) めぐらす

訳——と

まず、(27)は名詞接続の「かな」の文型で、説明文に次のようにある。

57 「名のかな」といふ。名を里同じ。又【でもあることかな】とい

ふ。凡そ「かな」は装を承くるを本とす。名を承けたる歌にも、必

ず上に第一の「哉」に承くべき詞あり。其所に「かな」をまはして

心得れば、二例只一つなる事しるきなり。へ一8才／(27)

そのままの位置で【かな・でもあることかな】と平行訳してもよいが、
次のように、名詞に上接する連体形の下に移動訳すると、

58 白雲の こなたかなたに 立ち別かれ 心を幣と くだく。事カナ旅か

なへ一8ウ、古今集8・三七九／(27)

59 のような連体形接続の「かな」(57に「第一の「哉」とあるもの)
と統一的に理解できると説いている。

59 二葉より 頼もしきかな 事カナ 春日山 木高き松の 種ぞと思へば

へ一8才、拾遺集5・二六七

『あゆひ抄』は連体形接続の「かな」を本来のものと見て、名詞接続
の「かな」の文型を、喚体の語順「心を幣とくだく(述)——旅(主)」
から、述体の語順「旅(主)——心を幣とくだく(述)」に変形すること
で、本来の連体形接続の「かな」に戻そうとしている。

次に、(28)の説明文は次のようにあるだけで、証歌もないが、
60 常に中の中にのみある詞也。詠みづめにありとも、中にある心にめぐ

らして心得べし。へ一17ウ／(28)

これはおそらく、倒置の結果、引用の「と」が句末(文末)に現れた場
合を指すのだろう。例えば「名にし負はばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人
はありやなしやと」〈古今集9・四一一〉とある倒置を、「我が思ふ人は
ありやなしやと言問はむ」という正置に変形することを言っていると考
えられる。ただし、60には「中にある心にめぐらして」とあるので、

理解する際にそうせよというだけで、実際の訳文は倒置したままでよいのかもしれない。

喚体句を述体句に変える(27)と、倒置を正置に変える(28)は、広い意味では移動訳に入れられるが(だから「めぐらす・まはす」によって指示されている)、これらは句の構造自体を変えてしまう移動であり、(26)まとは性質の異なる操作である。

第四節 一部移動訳と「くはふ」

前節で、「こそ(は)」の文型(20)を検討せずに下方移動訳としたが、実は問題がある。その問題を考えるために『あゆひ抄』の「ぞ・こそ」の整理の仕方を簡単に見ると、句中の「ぞ・こそ」の文型は、句末に名詞が来るか活用語が来るかによって分けられ、前者は「めぐらす(中のぞ・こそ)」、後者は「あたる(中のぞ・こそ)」と称されている。例えば「まれに今夜ぞ逢ふ坂の」(古今集13・六三四)の「今夜ぞ」と「逢ふ坂」の関係について次のように述べられている。

61 例の寄せたる詞なれば、心得て「逢ふ坂」とよみ切りて、めぐらす例とす。又「逢ふ」とよみ切りてあたる例ともいふべし。(二6オ)「寄せたる詞」は掛詞

前節で見た(17)「名詞類ぞ——名詞」は「めぐらす中のぞ」で、(18)「||ぞ——形容詞」は「あたる中のぞ」である。「こそ」にも「めぐらす中のこそ」と「あたる中のこそ」があり、「あたる」場合は【くよりも・なんの事なしに・外ではなしに】などが添加訳される。

62 梓弓 引けばもと末 わが方イツモヨリモに。よるこそまされ 恋の心は

△二7ウ、古今集12・六一〇

63 神南備の 三室の山を 秋行けばナンノ事ナシニ。錦裁ち切る 心地こそすれ △二7ウ、古今集5・二九六

64 枝よりも あだに散りにし 花なれば 落ちて外デハナシニても。水の 泡とこそなれ △二7ウ、古今集2・八一

「めぐらす」場合はさらに句末に【なれ】が加えられる。前掲49にも証歌を挙げたが、もう一例別の証歌を挙げよう。

65 影をだに いかでか見ましナンノ事ナシニ。契りこそ。うたて浅香の 山の

井の水。△二7オ、続千載集12・一一五四/(20)

さて、問題の(20)「||こそ——名詞」は、この「めぐらす中のこそ」の文型で、次の66がその説明文だが、検討すべき点がある。即ち、移動訳を意味する「めぐらす」という名称にも拘わらず、添加訳を指示するはずの「くはふ」が用いられているのである。

66 「めぐらす中のこそ」といふ。上何は名・装の引繼往・挿頭 脚結さままなり 下何は名なり ……、此の例は

下何の下に【なれ】といふことをくはへて心得べし。△二7オ

確かに、65では「こそ」はそのまま平行訳され、句末に【なれ】が添加訳されているように見える。また、同じ「めぐらす」文型である「ぞ」の(17)と「こそ」の(20)を単純化して並べると、

E || ぞ——名詞 (訳) || が——名詞ぢやぞ

F || こそ——名詞 (訳) || こそ——名詞なれ

Eでは原語「ぞ」をそのまま里言とした【ぞ】が句末に位置し、対照的に、Fでは「こそ」をそのまま使った【こそ】が句中に位置していることがわかる。前節で、Eの訳中の【が】(Dで【β】と表示した部分)を添加訳としたが、これと整合させるなら、Fの訳中の【なれ】も添加訳とせざるをえない。しかしそれでは、この「こそ」に与えられた「めぐらす中のこそ」という名称はどうなるのだろうか。

思うに、Eの「ぞ」の里言は【がくぢやぞ】¹¹で、Fの「こそ」の里言は【こそなれ】などではないだろうか。これは第一節で見た一部移動訳（訳語の一部【ぢやぞ・なれ】を下方移動）に当たり、この「こそ」を「めぐらす」と称するのは正当である。ただし、第一節で述べたように、一部移動訳は添加訳と紛れやすく、今の場合も、原語「こそ」をそのまま里言にしたのではない方（つまり句末の【なれ】を添加訳のように扱ってしまい、66では「くはふ」が使われたのだと思われる。全く同様のことが、次の文型についても見られる。

(29) a 不定語 || 已然形や——〔句中や^{已然形接続・疑問}〕下にくはふ

訳 不定語 || ば・によつて——ぞ

b || 已然形や——〔句中や^{已然形接続・疑問}〕くはふ

訳 || ば・によつて——か

これらの説明文は次の通りである——「一の様」が「上に疑の挿頭を承く」場合でa、「二の様」が「上に疑の挿頭なき」場合でb——。証歌は(29) aには68などが挙げられているが、(29) bは挙げられていない¹²。

67 「ばや」を略したる勢なれば「や」を【ば】と里し、又はやがて

【によつて】と心得て、打ち合ひの下に一の様には【ぞ】をくはへ、

二の様には【か】をくはへても心得べけれど、へ一19ウ／(29) a

68 荒れにけり あはれいく世の 宿なれや 住みけむ人の 訪れも

せぬへ一20オ、古今集18・九八四／(29) a

67も句末に【ぞ・か】を添加訳すると読めそうだが、しかし、前節で見た、同じ「や」の文型(13)・(13')の里言【か・ぞ】を句末に移動訳する）と整合的に解するなら、「や」の位置に【ば・によつて】を添加訳し、「や」の訳語【ぞ・か】を句末に移動訳すると読まなければならぬ。したがって、これも(20)の「こそ」と同じく、aは【ば・

によつてゝぞ」、bは【ば・によつてゝか】という一部移動訳なのが、混乱して「くはふ」が使用されたと見ることが出来る。

以上のことから、移動訳と判断されるものに「くはふ」が用いられているのは一部移動訳の場合で、添加訳と紛れたせいで誤って用いたと考えられる。また、このことを念頭に置いて、前節の単独の「つく・つむ」を見直すと、唯一の例外25（添加訳の指示）を除き、すべて一部移動訳の指示であることに気づく。語彙的に見ても「つく」と「くはふ」は類義的であり、もともと紛れやすい用語である。

おわりに

『あゆひ抄』に見える平行訳・移動訳・添加訳のうち、特に移動訳について観察した。まず、訳の指示と用語は、原則として次のような関係にある（「そふ・かぶらす」は考察を省いたが、結論だけ示す）。

G 全体移動訳：めぐらす（ゝてつく）・まはす（ゝてつく）

H 一部移動訳：つく・つむ

I 添加訳 ……くはふ・そふ・かぶらす

そして、移動訳がどのような場合に指示されているかを見るために、(1)～(29)の原語の位置が句中か句末かということに注目して、訳し方を整理すると、表3のようになる。

表3から、移動訳が指示されているのは、句中に原語が位置する場合で、その主なもの係助詞（し・も・ぞ・こそ・か・や）であることがわかる。その他の、陳述副詞（な）・副助詞（のみ）——問投助詞「や」は「こそや」の形の孤例で、成章も躊躇していたので保留——も含め、これらは意味上、句全体に関係するものである。係助詞は、疑問

表3

句末	句中										全部移動	一部移動
	と	かな	のみ	禁止副詞な	や 問意助詞	や (は) 係助詞	か (も・は)	こそ	ぞ	も	し	しも
(28) ?	(27) ?							(2) (3)	(1)	(6) (5) (5')	(4)	上方
			(26) (24)	(22)	(14)	(7)	(21)	(19) (23)		(25)		下方
					(15) a (16)	(8) (9) (10) (11) a (12)	(13) a・b (11) b (13') (15) b (29) a・b	(9') (17)	(20)	(17) (18)		下方
? : 他と性質が異なる (第三節)												

の「か」を例にして言えば、上接部を疑問の焦点として示すが、疑問という意味は句(文)全体に関わり、その文(句)全体の性質を決める。陳述副詞「な」の表す禁止の意味も明らかに文(句)全体に関係する。また、「のみ」が句全体に関係する第二種副助詞であることは、かつて述べた通りである¹³。要するに、『あゆひ抄』が移動訳を指示するのは、原語が句中に位置しながらも意味上は句全体に関わる場合である。

ある語が句全体に関係する時、その語は句中よりも句末に位置する方がわかりやすい。これは、研究の対象となる古典語よりも、成章や我々が使用する近現代語で一層顕著である。例えば、疑問の「か」は句中の用法は失ったが、句末では用いられ続けているし、句中で禁止を予告する「な(ゝそ)」は使われなくなったが、句末で禁止を決定する「ゝな」は残っている。したがって、表3にあるような古典語を現代語訳する場合に、訳語を句末に移動して訳すのは優れた訳し方だと言える。

上方移動訳はどうだろうか。『あゆひ抄』が上方移動訳する際に与えた里言は、(1)「さても」、(2)・(3)「こちは・何かしらず」、(4)「……

も多きに・もあらうに」に「かぎつて」、(5)・(5')「あながち」、(6)「もとより」で、副詞または副詞的成分である。一般に副詞の表す意味は句全体に関係し¹⁴、『あゆひ抄』は、副詞(挿頭)と助詞(脚結)をともに「ことばをたすく」(一オ)と規定する。脚結を訳すのに挿頭を用いることは、その脚結が句全体に関わることを意味するだろう。よって、上方移動訳も句全体に関係することを示しうる訳だと言える(本稿冒頭のくり返しになるが、個々の里言の当否は今問わない)。

以上、『あゆひ抄』の移動訳を観察することで得た、訳語の位置に関する知見を、最後にまとめておく。

① 句中に位置しながらも意味上は句全体に関わる原語(係助詞・第二種副助詞など)を現代語訳する場合、移動訳を行うとよい。

② 句末に下方移動訳する場合の訳語には助詞類を用い、上方移動訳する場合には副詞類を用いるとよい。

『あゆひ抄』が「くはふ・そふ・かぶらす」を使って指示する添加訳についても、訳語をどの位置に添加するかが問題になることがあるが、これについては機会を改めることにしたい。

注

1 古典語と現代語の対照言語学の意義は、近藤「二〇〇〇」を参照。

2 ここで述べているよりはるかに意識的・方法的に解説されている。

3 竹岡「一九七一」を参照。

4 次の「なに」の訳語を「なせくか」と見なせば、下方一部移動訳の例とできなくもない。

◇春霞 なに隠すらむ さくら花 散る間をだにも 見るべきものを

〈古今集2・七九/山の桜を見てよめる 紀貫之〉

訳文「春霞はなせ桜の花を隠すのだろうか。どうせ短い花の命だから、それが散る時のしばらくの間なりとも、私は見てやらなければならぬのに。」

4 刊本からの引用は巻、数、丁数を記し、表記などを改める。

5 次のような「連用形も——か」も(1)に含める。

◇吹き迷ふ 野風を寒み 秋萩の サテモ。移りも行くか 人の心のへー
9 才、古今集15・七八一

6 この「し」は【そのやうに】を平行訳してもよい(二二7ウ)。

◇いく代し ソノヤウニモ も あらじ我が身を なぞもかく 海人の刈る藻に 思
ひ乱るる 古今集18・九三四

7 現在では「な」は副詞とされるが、『あゆひ抄』は「中昔よりは多くは「な」文字、句の中にあるやうによめり」(二二9ウ)と述べ、脚結として扱っている。なお、次のような場合も(24)に含める。

◇忘るとも かねな ル事ハキトムヨウ 果てそも 秋の野の 草葉に露の かかる程
だに へー30ウ、斎宮女御集・西本願寺本三十六人集・一五一／『斎宮女御集注釈』(一九八一年、塙書房) によれば初句「忘るらむ」
◇ちはやぶる 出石の宮の 神の駒 カマヘテノルコトハオケ ゆめな乗りそや たたりもぞす
る へー31才、新拾遺集20・一八九四

8 喚体・述体とその変形は、山田「一九三六」第四十四、六章を参照。
9 「こそは」は「こそ」と同意なので(二二9才)、本節では「こそ」に含めることとする。

10 ちなみに、(17)は「めぐら、す中のぞ」の文型だから、その説明文
27も当然、移動訳の説明である。よって、それを形式化したDは移動訳を指示する文の形式ということになり、単独の「つく」が移動訳を指示すると見た前節の考察は、補強される。

11 現代でも「ぞ」を【が】と平行訳することは広く行われている。
大野「一九九三」などを参照。

12 (29)bは、よりよい訳として【やらん】を平行訳することが示されており(二二19ウ)、その証歌が挙げられている。

◇我が恋は 深山隠れの 草なれや チヤヤラ しげさまされど 知る人のなき
へー20才、古今集12・五六〇

13 小柳「一九九八」・「一九九九」などを参照。

14 小柳「二〇〇五」を参照。

参考文献

- 大野晋「一九九三」『係り結びの研究』岩波書店
小柳智一「一九九八」「中古の「ノミ」について——存在単質性の副助詞——」(『国学院雑誌』99・7)
小柳智一「一九九九」「万葉集のノミ——史的変容——」(『実践国文学』55)
小柳智一「二〇〇五」「副詞と否定——中古の「必ず」——」(『福岡教育大学国語科研究論集』46)
近藤泰弘「二〇〇〇」『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
竹岡正夫「一九七一」『富士谷成章の学説についての研究』風間書房
山田孝雄「一九三六」『日本文法学概論』宝文館出版
付記 本研究は、平成十八年度科学研究費補助金(若手研究B、課題番号一七七二〇一〇一)の成果の一部である。